



とよだ みき氏の横顔

・86年 豊橋義塾大学卒・カリフォルニア州立大学留学 / 商業デザイン専攻
 ・88年 (株)エス・ピー・エーでマーケティングコンサルティング従事
 ・90年 ガーデンデザイナー活動を開始
 ・93年 (有)バウムスタンプ設立 代表就任
 ・97年 同社デザイン部門を独立 (有)オフィストヨタ設立 代表就任
 著 書 「ガーデンデザインの本」「スモールガーデンの本」
 「とよだみきのガーデンデザインレッスン」(講談社)

永田 等

弊社エクステリア建材事業本部長



とよだ氏

モノづくりの伝統技術で 新しいアルミ文化を創造しましょう

永田 私どもの本社がある富山県高岡市は初めてということなので、まずアルミ産業と高岡の関係について簡単にお話します。もともと高岡は加賀前田藩の領地だったんですが、二代藩主の時に産業政策の一環として高岡に鋳物産業を起こしました。鋳物産業は加賀藩の中心である金沢の文化が育んできた“美術工芸”の流れを汲み、それが今日の伝統産業である高岡銅器にまで発展しました。また、時代のニーズに伴って、銅からアルミという新しい素材へ、美術工芸品から日用品、さらには建材という新しい分野へと広がり、アルミ産業が発展してきたわけです。

とよだ氏 高岡はしっとりした趣のある街だなという印象を持ったのですが、そうした美術工芸の伝統が引き継がれている所だからなんですね。

永田 当社は、エクステリア業界に参入して20年になりますが、その間、いわば“素材としてのアルミ”で今日まで来た感があります。しかし今後ビジネスとしてさらに発展させていくには、デザインということをしっかり意識してモノづくりを行い、暮らしの中に深く息づいていかなければならないと考えています。

とよだ氏 まさにその通りだと思います。デザインということになると、そのものだけではなく景観や街並みなど周囲との関連性も踏まえる必要が出てきます。そうしたきちんとした意味付けが前提にあってモノづくりをするというのは絶対に必要なことだと思います。

実は私、高岡に来てお話を伺ったり、実際にアルミの商品を拝見して、アルミというものに興味を感じ始めているんですよ。

永田 それはうれしい話ですね。是非、具体的に聞かせて下さい。

とよだ氏 まず、アルミにはアルミという素材がもつ美しさがありますから、それを全面的に打ち出すことが必要だと思います。そして、アルミをさらに利用していこうというのであれば、建物のデザインと関連させて考えることが大切でしょう。住宅の建材にきっちりアルミを使い、さらに外構でアルミの魅力を発揮している商品を使用すれば、建物とエクステリアとの間に統一感を出すことができるわけです。

例えば、アルミの商品をふんだんに使ったモデルハウスをつくるのも一案で、その中からエクステリアの方向性も感じとれてくると思うんですよ。

鋳物文化をつくった高岡が、今度はアルミ文化をつくっていけるんじゃないですか。期待しちゃいますね、私は。

日本に於ける新しい庭文化は 先人の知恵に学ぶことから生まれる

永田 先生は新しい庭のあり方を提案され高い評価を受けていらっしゃいますが、新しさの鍵は何なのでしょう。

とよだ氏 新しいというよりも、現在の生活を日本人が昔から持っている感性の面から見直す作業をしているんですよ。もともと日本人は雪見障子を用いて外の風景をインテリアに取り入れたり、縁側という、庭と建物のつなぎの場をつくるなど、自然を感じることに得意な民族だったと思います。それが、家の中と外をはっきり分けてしまう建物が登場した頃から、外での過ごし方が下手になったんじゃないでしょうか。ですから、もう一度今の生活に合わせた形での庭のあり方を提案すれば、まったく新しい庭の魅力を引き出せると思います。

永田 なるほど。今の生活に合わせた形というのが、先生が常におっしゃっている“使う庭”であり“過ごす庭”なんですね。では先生がプランニングの段階で大切に



INDEX

■ 対 談 / とよだ みき氏 & 永田本部長	— 1
■ 設計ノート / アベ建材株式会社	— 4
■ '99年秋 新商品ダイジェスト	— 5
■ 御庭会通信	— 表4